間諜（かんちょう）

下巻

杉本章子

中公文庫

中公文庫

間諜（下）

定価はカバーに表示してあります。

1997年3月3日印刷
1997年3月18日発行

著者　杉本章子

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Akiko Sugimoto

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202813-2　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

間　　諜

下　巻

中央公論社

間諜

下卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

六―一

横浜の日本人町は、不穏に満ちていた。

三日前、日本の暦で言えば三月十四日あたりから、イギリスと幕府が一戦を交えるらしいという風説が流れ、住民たちは家財道具をまとめて続々と避難をはじめたのである。

四人いる通いの日本人下僕も、昨日の朝からイギリス公使館に姿を見せなくなった。おかげで住みこみの馬丁一人が、清国人召使頭の張に教えられながら、館内の清掃や洗濯などもろもろの雑用をやらされている。

「これは、どうしたことだね」

階段の裏手にある公使専用の小食堂に昼餐をとりにきた代理公使のニールは、扉をあけるなり目を瞠った。館内の二つの厨房をあずかる料理人でもある張を手伝って、

キューパー提督の妾（ミストレス）オムラが、かいがいしくテーブルの準備をしていたからである。

「兼吉（カネキチ）、逃げました。マダム、手伝ってくれる、あります」

張が手を止めて、おずおずと弁解した。かつて居留地七十五番のディビッド・サッスーン商会に雇われていたこの小柄な三十男は、イギリス語も日本語も会話程度ならなんとか話せるのだ。

「兼吉が？　いつのことだね」

ニールはテーブルにつきながら、訊ねた。兼吉というのは、馬丁の名前である。

「朝のこと、あります」

兼吉は今朝九時すぎに、公使館から西へ歩いて四、五分のところにある雑貨屋へ買い物に行ったきり戻らないのだと、張は話した。

「ふむ……。それなら、本館（こちら）へは水兵でも入れて、雑用をやらせるか」

と、ニールは眉をしわめた。

館員（スタッフ）や騎馬警護隊の連中は別棟の大食堂（ホール）を使うが、張はその厨房を下僕たちに任せていた。むろん献立をつくって下ごしらえの指図をしたり、味を見たりはするのだが、下僕たちは器用で会得が早く、どうにか料理人と給仕の用を足していたからである。

彼らがこないとなると、張一人ではどうにもならない。昨日の朝、下僕たちの欠勤を知ったニールは急きょ、キューパーに頼んで四人の司厨兵を艦から呼び、大食堂の厨房に入れた。

その夕方のことである。

執務を終えたニールが二階の私室に引き上げてくると、張が手取り足取りして、兼吉にベッドのつくり方を教えていた。ふだんなら下僕が朝のうちにやっておくのだが、兼吉の手伝いぐらいではなにからなにまで張の肩にかかって、仕事がひどく遅れているらしい。

このさまを見たニールは、本館にも雑用に水兵を使えば張も助かるだろうと思ったのだが、これは思いとどまった。なにしろ二階の一室には、水兵たちの総帥である艦隊司令官のキューパーが妾と同居しているのだ。キューパーの身になれば、体面もあり、私事を水兵などに知られたくはなかろう。

しかし兼吉も逃げたとなると、キューパーの体面ばかりを思いやってもいられない。ニールは張に、そうすれば君も助かる、と声をかけた。すると、パイ包みのステーキ・ウエリントンを皿に盛っていた張はしばらく黙りこんだのち、ぼそぼそと言った。

「水兵さん、わたしといっしょ、仕事嫌がる。わたし、虐(いじ)められる、あります」

「……」

ニールは前任地の北京(ペキン)で、西洋人(はくじん)の軍人や商人に牛馬のように酷使されていた清国人の姿を嫌というほど見てきただけに、張の気持ちが分からないでもなかった。いや、そういうことのないように、前もって水兵に諭(さと)すと言おうとしたときである。

オムラが、なにやら張に話しかけた。どうやら張の沈みこんだ顔色が気になったとみえて、いまの話を訊ねるつもりらしい。張はステーキの皿に目を落としたまま、日本語でぽつりぽつりと答えた。

それを聞いたオムラは、張のそばへ寄ってなにやら伝えた。張は顔を上げたものの、まなざしを宙に浮かせてためらっていたが、やがて思い切ったように言った。

「マダム、手伝うあるから、水兵さん、いらないと……」

「そんなことはできんよ」

ニールは苦笑して、首を振った。かりにも艦隊司令官の妾である。女中代(メイド)わりに使うわけにはいかない。

通訳生のサトウが黒曜石のようだとたたえていた瞳を、じっとニールに注いでいた

オムラは、拒絶と見て取ったらしく、またしてもなにやら張にささやいた。なんとかして説きつける気のようだ。

そこへ、キューパーが姿を現わした。キューパーは午前中、幕僚を伴って山手（ブラフ）の海岸にあるイギリス海軍の物置所の検分に出向いていたのである。

「いかがでした。なんとか駐屯できそうですかな」

ニールは、向かいの席についたキューパーに訊ねた。

「ええ。二千四百平方ヤードほどの土地に、大小六棟の建物がありますから、海兵一大隊は駐屯できます」

答えながらキューパーは、張のそばに突っ立っているオムラにちらりと目をやった。張は慌ててステーキの皿を捧げ持つと、ニールの前に運び、テーブルをまわってオムラのためにキューパーの左わきの椅子を引いた。オムラは話が中断されて心残りのふうであったが、それでも淑（しと）やかに椅子にかけた。

「それはよかった。では、会談の席で海兵の駐屯を持ち出して、幕府（バクフ）を揺さぶることができますな」

と、ニールは言った。本日三月十七日と明十八日の両日、いずれも午後二時から幕

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

府と会談をもつのである。

「できますとも。ときに公使……オムラのことでなにかあったのでしょうか」

ふだんとはちがう雰囲気を、キューパーは感じ取ったようである。

「いやいや」

ニールは笑みを浮かべながら、さきほどの話を聞かせてやった。

「オムラがそう頼むのであれば、ひとつ手伝わせてやっていただけませんか、公使」

聞き終えると、キューパーは即座に言った。

「……」

とんでもない、と一笑に付すだろうと思っていたニールは驚いた。キューパーの皿に料理を盛っていた張の顔にも、驚きと安堵の色が浮かんだ。

「退屈のあまりでしょうから、好きにさせてやってください」

キューパーはかたわらのオムラをさも愛しそうに見たあと、このことを彼女に伝えたまえ、と張に命じた。

キューパーは、上機嫌である。オムラに甘いせいもあろうが、その実は、妾と同居している本館へ水兵など入れたくないのが本心だろう、とニールは読んだ。張が日本

語でキューパーの言葉を伝えると、オムラは満面に喜色をたたえて、深々とキューパーに頭をさげ、それからニールにも頭をさげた。

――これが……。

公使館で初めて朝を迎えた日に、ひっそりと涙していたあの日本娘だろうか。ニールは、冷たい潮風の吹き上げてくる早朝のベランダでの偶然の出会いを思い浮かべた。あのとき緋色の絹の着物をまとったオムラの蒼白いほおに涙がきらめいていたのを、ニールはいまも鮮やかに覚えている。

日本人がけもののように忌み嫌っている外国人の妾となるからには、きっとよくせきの事情があってのことだろう。ニールは彼女の心中を察して少し胸を痛め、早々にベランダを引き上げ、私室に戻ったものである。

ところがオムラは、涙にくれていたことなどまるでうそのように、その日から進んで外国人の暮らしに溶けこみはじめ、ニールを驚かせたのである。香水をつけて楽しんだり、キューパーの勧めるシェリー酒を優雅な手つきで飲んでみたり、紅茶の淹れ方を張に教わったり、と信じられない変身ぶりを見せた。

ただ食肉だけはどうしても喉を通らぬらしく、張が梭魚の姿焼きや比目魚の蒸し煮

などの魚料理を作ってやると、これまた見よう見まねでナイフとフォークをあやつり、危なげな手つきで口元へ運ぶのだった。キューパーは、この涙ぐましい変身ぶりを自分への一途な愛情からと解しているらしく、オムラへの傾斜をいっそう深めていくようである。

だが、あの朝の光景が瞼に焼きついているニールは、オムラの変身ぶりを釈然としない目で見ていた。

ことに、張の手伝いを申し出たときのオムラのしつこさたるや、ニールにはけげんでならなかった。あれはどう見ても、退屈しのぎを思いついた顔などではない。しかし、キューパーの口添えをむげに断わるわけにもいかないのだ。

「まあ、そういうことでしたら……」

ニールはしかたなく承知して、ナプキンを膝に広げた。

定刻の二時には、まだかなりの間があるのに、フランスのベルクール公使と提督ベンジャミン・ジョーレス少将がせかせかとやってきた。

幕府との会談には、この二人も同席するのである。イギリス側はニールとキューパーが会談にのぞみ、これに通訳官のユースデンが陪席することになっていた。ニール

とキューパーは、二人を応接室に招じ入れた。

そこには両日にわたる会談に備えて、大卓をはさみ、イギリスとフランス側の椅子が五脚、幕府側の椅子が三脚、整然と対面に並べられていた。幕府側は外国奉行（ガバナー・オブ・フォリンアフェアーズ）の竹本甲斐守正雅（タケモトカイノカミマサツネ）と竹本隼人正正明（ハヤトノショーマサアキ）、それに通辞方役人の三人が出席する。

会談には決まって顔を出す記録係の調役書物方（シラベヤクカキモノカタ）と監視役の目付（メツケ）は、このたび外（はず）されているのだ。そのように要求したのは、イギリスとフランス側である。そもそも、この会談にしてからが両国の求めによるもので、ひたすら回答期限の延期を乞う幕府は、なにひとつ逆らうことなくこれに応じた。

十三日前の三月四日――幕府はベルクールを介して、償金支払いの回答延期を申し入れてきた。

深謀をめぐらすニールは、渋々といったていでベルクールの斡旋をいれ、回答期限前日の三月七日になって、幕府との会談に応じた。当日、イギリス公使館へ出向いてきたのは、外国掛若年寄有馬遠江守道純（セカンド・カウンシルアリマトオトーミノカミミチズミ）と竹本甲斐守、それにいつもの連中である。

まだ二十代なかばとおぼしい有馬は、全身を硬くして、大君（タイクン）の留守を預かる老中（ロージュー）たちは諾否いずれの回答も出す権を持たないのだと、もう聞き飽きた言葉をくどくどと述べた。そのうえで、回答期限を大君が京都から戻る四月初めまで延ばしてほしいと、懇請したのである。

もともと幕府に時日をかしてやるつもりのニールは、うんざりしながらも耳を傾けていたが、それにしてもひと月もの日延べを乞うとは虫のいい話である。ニールはこのたびも甘い顔を見せずに懇請を一蹴して、有馬と竹本が重ねて押してくるのを待った。

案の定、二人が押してきたので、十五日間の延期ならば、と折れてやったのである。有馬と竹本はそれでもなお、ひと月の延期を求めてやまず、ニールが会談の決裂を口にして席を立ちかけると、慌てて折れた。

ところが三月十四日の午前十一時ごろ、同じ顔ぶれが予告もせずに再び、公使館へやってきた。ニールとキューパーがしかたなく会うと、有馬は留守老中の松平豊前守（マツダイラブゼンノカミ）信義と井上河内守（イノウエカワチノカミ）正直（マサナオ）の連署した三十日間の延長を請う嘆願書を臆面（おくめん）もなく差し出して、またもや先日の懇請を繰り返すではないか。ニールは苦笑しながら有馬の言葉

をさえぎり、返答は後日知らせると約して、話を変えた。

「ところで、今朝あたりから日本人町の住民は、イギリスと幕府が一戦を交えるという風説（うわさ）におびえて続々と避難しているが、神奈川奉行（カナガワブギョウ）はこの事態を傍観している。両国にとって由々しい風説を打ち消しもせず、手をこまぬいているのはいかなるわけか、と訊ねたまえ」

ニールは、ユースデンに言った。ユースデンが、これを通辞方役人に伝えた。通辞方役人が日本語に直したニールの言葉を伝えると、有馬は一瞬狼狽（ろうばい）を見せたが、竹本は動ずる色もなく、落ち着き払った声で通辞方役人になにやら告げたのである。

「すでに神奈川奉行は名主（ナヌシ）を通じて、愚かな風説に惑わされず、安心して家業に戻れと触れを出しているそうです。しかし、住民たちの騒ぎはいまもって鎮まらずにいる、と言っています」

通辞方役人の口から返ってきた竹本の言葉を、ユースデンが伝えた。

「はてさて、ほんとうかね」

ニールは、自若としている竹本を見ながらつぶやいた。竹本はニールを見返して泰然とかまえているが、有馬の様子では怪しいものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com